

藤原定家「明月記」における瘧疾

中村 昭

瘧疾（マラリア）は現代の日本では土着の疾病としては消滅してしまつたが、過去においては相当蔓延していたことがわかっている。平安時代にこれがわらわやみと呼ばれていたのも、風土病地帯では成人は大体免疫ができてしまつて主として小児に典型的な症状が見られた為と考えられる。鎌倉時代の京都もマラリアの風土病地帯だつたと思われるが、そこでも時々疫病の様にマラリアが勢を増すことがあり、「明月記」でも定家の子が三人共瘧病に侵されたことを次の様に書いている。（「明月記」は変則的漢文で書かれているが、仮名まじり文にして引用する。）

「正治元年七月十三日、

小兒今日又未時ばかり発る、小男又此兩三日温氣病惱、天下瘧病計ふるに勝ふべからず、三人子共に病む、不思議なり。」

発るといふのはマラリアの熱発作のことを言っている。日本に存在したマラリアは三日熱であり、隔日に発熱した。「明月記」には次の様に定家自身が瘧を患つた時の記述もあり、隔日に大体同じ時刻に発熱したことがわかり、しかもそのことは当時常識として知られていた様である。

「正治元年八月十四日、
車中より心神忽ち不快、手足^{つまま}麻目甚だ痛む、酉時^{とり}以後前後不覚、是^{おこり}発心地か。」

「同八月十六日、

発日怖畏により即ち退出帰廬、未時^{むじ}ばかり発出づ。」

「同八月十八日、

朝より垣山湯に浴す、未^{むじ}一点ばかり體^{からだ}の中に於て発出づ、今日動熱^{どうねつ}愈ふる物無し。」

「同八月廿日

早且九条地藏堂に詣つ、未時^{むじ}その気あり、仍ち急ぎ帰る間、例の如く^{おこり}発出づ。」

「同八月廿二日、

聖尊阿闍梨来たる、巳時^みばかり即ち護身、申終^{まご}ばかりその気あり、但し事の外宜し。」

「同八月廿四日、

聖尊阿闍梨又来たる、終日護身の間、今日無為^{むゐ}落ち得了ぬ。感悅^{かんげつ}極まり無し。」

以上要点だけを摘録したが、心神不快、咳気等の記述も頻繁である。治療は専ら祈禱に頼っている。

さて、マラリアの急性期を脱しても慢性マラリア症に移行するケースが多かつたことは近代マラリア学の教える所である。定家の場合、自分で風病と書いている次の様な不定症状を頻々と経験している。これらも慢性マラリアの症状と解釈することが可能と思われる。

「正治二年三月廿四日、

巳時^みばかり蟻^{あま}蟻^{あま}を出で京に帰る、風病猶不快、心神甚だ悩む。」
「同七月廿一日、

頭病み手足痛む、温気あるを以てなり、但し身殊に温からず、心中殊に違乱、午後腹苦痛、終日不食、無力又殊に甚だし。」

「同十月二日、

風病連夜発り為ん方なし、仍ち沐浴す。」

「同十月廿九日、

巳時ばかり忽ち振ひ出づ。又小温気あり汗出で、即ち又沍寒此くの如し、度々寒温。」

「同十一月一日、

今日昨日殊に発らず、只咳病猶以て術無きの上、心神窮屈為ん方なし」

この他、「明月記」に記載されている多くの瘧疾の症例について考察を加えて報告した。

ハイステル外科書蘭訳本の「扉絵

古川 明

ハイステルの「外科学」Laurens Heister: Chirurgie, 1718 の蘭訳本 *Heekundige Onderwysigen, 1741* は、杉田玄白が「ハイステルのシュルゼイン」と称したことで有名である。この本には、興味ある扉絵があり、それにはオランダ語の解説文がついている。しかし現在までわが国では、この解説文を翻訳または解説した人はひとりもないようである。演者はこの扉絵のほぼ中央に、医学の象徴「アスクレピオスの杖」が描かれていることに印象を受け、解説文の翻訳を試みた（扉絵は原著に掲載する予定につき、ここには省略した）。

「扉絵の解説」の概略

扉絵のほぼ中央に描かれている有鬚の人物はギリシャ神話のアポロン神で、彼の頭は月桂冠で飾られている。彼の右手には、「アスクレピオスの杖」が握られ、この杖はアポロンの息子、医神アスクレピオス自身を表現している。絵の上部の楕円形の額には、本書の著者ハイステルの肖像が描かれ、下部の額には、翻訳者ユルホールン (Hendrik Uthoom) の肖像が描かれている。解説によれば、ハイステルはこの絵では、アスクレピオスの息子マカオンとして、ユルホールンは同じくポダレイリオスとして、ここに登場したことになっている。ハイステルとユルホールンは、ともに軍医であり、マカオンとポダレイリオスも、トロイア戦争